みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

New Zealand's Outstanding Educational System (Japan, Australia, and New Zealand : Sharing a Vision of Asia-Pacific Cooperation) (ESSAYS : THE CULTURE AND SOUL OF OCEANIA)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 印東, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008389

ニュージーランドの優れた教育システム

■ 印東道子 ■
北海道東海大学国際文化学部教授

いんとう　みちこ

東京女子大学史学科卒業。同科助手を経て1981〜88年にニュージーランド・オタゴ大学大学院へ留学。オセアニアの考古学研究で人類学修士およびPh.D.を取得。1988年に新設された北海道東海大学国際文化学部助教授として帰国し、1996年より現職。ミクロネシアの島々で十数回の発掘調査を行なっている。主な共編著書に『オセアニア：島嶼に生きる』『モンゴロイドの道』『世界を掘る』『生活技術の人類学』『フィールドワークを歩く』などがある。

オセアニア研究のメッカに学ぶ

ニュージーランドで学位を取ったと言うと、なぜニュージーランドなのかと一様に聞かれる。たしかに日本ではニュージーランドの大学に関する情報は少なく、なじみも薄い。しかし、オセアニアの人類学、考古学を研究する者にとっては、伝統ある研究センターの置かれた重要な拠点の一つとして、長く認識されてきた国なのである。

私が留学したオタゴ大学の人類学科は、南半球で最初に設立された長い歴史を持つ。その背景には、一九世紀前半から植民を開始したイギリス人と、ニュージーランドの先住民であるマオリ族の存在があった。入植が開始されてから二〇年も経ずして最初の発掘が行なわれ、大きな鳥の骨が地中から掘り出された。ニュージーランドに現存する鳥のサイズをはるかに超えており、明らかに絶滅した鳥がいたことを示していた。しかも人間が作った石器や焼けた石が骨と一緒に見つかったことから、先史マオリ文化への興味も一気に増加した。

これ以後、本格的な考古学調査が開始されるとともに、マオリに対する民族・人類学的調査も開始された。口頭伝承には、驚くほど豊かな資料が含まれており、マオリ研究の長い伝統が始まったのである。マオリ文化の起源を考えるには、その故地であるポリネシア文化の研究も不可欠であった。そこで一八九二年には、ポリネシア文化の研究を目的とするポリネシ

ア協会がオークランドに設立された。協会が発行する季刊誌〝Journal of the Polynesian Society〟は、ニュージーランドやポリネシアにとどまらず、オセアニア全体を対象とした人類学や考古学研究に発表の場を提供し続け、オセアニア研究では世界的にもっとも評価の高い雑誌の一つである。

充実した研究環境

このようにオセアニア研究の伝統ある国で、私は七年間の研究生活を送ったのであるが、その恵まれた研究環境は、今思い出してもすばらしいものであった。多様な国籍の専任教員に加えて、イギリスやアメリカなどから短期間招かれた著名な人類学者や考古学者によって、高い研究水準が保たれていた。これらの人々のなかには、ニュージーランドを去りがたくなって永住した例も多い。自然環境のすばらしさ、人間の素朴さなども彼らを惹きつけたのであるが、大学における恵まれた研究環境もまた、彼らを彼の地に引き止めたようである。

研究費はそれほど潤沢にあったわけではない。しかし、教員をサポートする技術スタッフの充実度は群を抜いていた。考古学分野では、プロのカメラマンやイラストレーターがスタッフとして雇われていた。大学院生であった私が調査した遺跡や遺物の写真も、現像したり撮影したりしてくれ、すばらしい遺物の実測図も書いてくれた。日本であれば、学生は自分の資料はもちろん指導教員の資料まで、写真を撮って実測図を書かなくてはならない。まさに至福の環境であった。

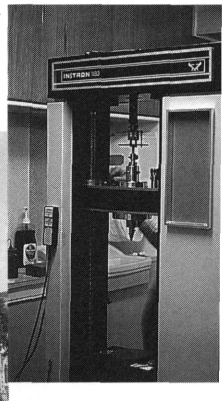
また、私はミクロネシアのヤップ島の伝統的土器作りを研究したのであるが、粘土や焼き上がった土器の特性を調べる際には、人類学とは縁の遠い化学科や物理学科へ出かけ、技術スタッフのお世話にもなった。私が何を調べたいかを説明すると、適切な機器を選んで使わせてくれ、適当なものがない場合にはわざわざ作ってくれもした。大学で使う機械の修理は技術スタッフが行なうし、部品がなければ作ってしまうということは聞いていたが、手作りの仕事に接して本当に驚いた。まさに大学のおかかえ専門職人なのである。

教育の本質に行き着く

このように充実した研究サポート態勢に加えて、現在の私の考え方にもっとも影響を与えたのは、教員と学生との関係である。両者の間に越えがたい溝が存在する日本と違って、対等な学問的議論がしばしば展開する。言い換えれば、それだけ学生の知的レベルが高いということでもある。大学を離れれば教授の肩書きは消え、個人と個人の交流が息づく。教育とは、学生に教員の知識を施すことではなく、学生の知的興味を刺激し、研究の方向性や方法を指し示すことにあるという、あたりまえのことを学んだ。

残念ながら、私が体験した教育システムは、現在ニュージーランド政府が行なっている経済改革政策によって崩壊しつつある。政府の教育予算が学生数に応じて配分されるようになり、学生数の少ない基礎的な学問分野を持つ学科などは廃止の危機に直面し、技術スタッフは大量に解雇されたと聞いている。国全体の経済を立て直すにはある期間、ある程度の犠牲は必要かもしれない。しかし、優れた研究者を輩出してきたその土壌をいったん失えば、それを再び整えるには多くのエネルギーと時間が必要になる。以前のようなすばらしい教育・研究環境が、一日でも早く戻ることを祈らずにはいられない。

伝統の重みを感じさせるオタゴ大学のキャンパス。写真右手でバグパイプを演奏しているのは筆者



研究スタッフの協力態勢は抜群。土器の硬さを調べるために、歯学部では入れ歯用強度測定器を貸し出してくれた